

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

鍋沢元蔵によるアイヌ語のカナ表記体系：
国立民族学博物館所蔵筆録ノートから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 志保 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006039

鍋沢元蔵によるアイヌ語のカナ表記体系

— 国立民族学博物館所蔵筆録ノートから —¹⁾

遠藤 志保

北海道博物館

1 目的

本稿では、国立民族学博物館所蔵の鍋沢元蔵筆録ノート（以下、「民博所蔵ノート」）における鍋沢元蔵による音転写について記述し、民博所蔵ノートでのアイヌ語の表記体系の分析を行う。

さらに、各音素の表記のみならず、音韻交替など、形態素分析と実際の発音との間にずれが生じる場合の表記についても記述する。

2 使用テキスト

本稿では、鍋沢元蔵筆録による民博所蔵ノート（全5冊）を分析の対象とする。また、各ノートを指す記号は、本報告書における Nabesawa-1, Nabesawa-2 などをもそのまま使用する。

このノートならびに筆録者である鍋沢元蔵については、本報告書所収の中川裕「国立民族学博物館所蔵 鍋沢元蔵ノートの分析」にまとめられている。

「Nabesawa-1」ならびに「Nabesawa-2」は昭和3（1928）年2月に筆録されたノートであり、現在知られている鍋沢筆録のテキストとしては最も古い。「Nabesawa-3」は昭和29（1954）年2月筆録、「Nabesawa-4」は昭和29（1954）年3月筆録、「Nabesawa-5」は昭和34（1959）年2月筆録のノートである。

筆録者の鍋沢元蔵は、すべてのノートにおいて、カタカナでアイヌ語を表記している。カナ表記を覚えた背景、すなわち教育歴については、片山龍峯による調査テープ²⁾に収められた、鍋沢の息子・強巳への聞き取り調査において断片的ながら語られている。それによると、強巳の父・元蔵は「小学校2年、途中からやめた人」であり、「カタカナ・ひらがなしか知らなかった」（テープ番号66 A面）とのことである。また、Nabesawa-2のみ、和訳部分に漢字も使われているが、こうした漢字については、「ハガキを手にかけては筆で書いたり」していた（テープ番号66 A面）、あるいは80才を過ぎても暇があれば強巳に漢字の読み方を聞いていた（テープ番号73 B面）などと語られていることから、手元に届いた手紙などの周囲にある文書を参考に、独学で学んだようである。

3 アイヌ語沙流方言の音素体系

鍋沢の表記法について見る前に、田村（1988）ならびに中川（2006）を参考に、アイヌ語、特に鍋沢の生活地であった沙流地方のアイヌ語における音素体系を確認しておく。

アイヌ語北海道方言における音素は、次の5つの母音と11の子音（声門閉鎖音 /ʔ/ を含めると12）から成り立つ。

母音：/a, e, i, o, u/

子音：/p, t, k, c, m, n, s, h, r, y, w, (ʔ) /

破裂音 p, t, k には無声／有声あるいは無気／有気といった対立はない。

また、/c/ は、日本語のチャ行の子音に当たるような破擦音 [tʃ] である。

声門閉鎖音 [ʔ] (/ʔ/) については、音素とみなす立場とみなさない立場の研究者がいるため、ここでは括弧書きで表した。「母音の前にこれがつくと、はっきりした声立てとなる。語頭や母音間にも出る」（田村 1996: xv）のように音的実質として現れはするものの、アイヌ語北海道方言においては「その喉頭の緊張も弱まって、事実上無くなってしまふこともある」（服部 1964: 34）など、常に現れるわけでもないという記述も見られる。また、声門閉鎖音が意味の弁別機能をほぼ有していないことなどもあって、音素体系において「これを独立した音素として認める必要があるかという点」については議論がある（中川 2006: 2）。

また、アイヌ語沙流方言の音節構造は、母音を V、子音を C で表すと、

$(C_1) V (C_2)$: $C_2 = /p, t, k, m, n, s, r, y, w/$

であり、音節（母音）の長短の区別はない。

4 先行研究

アイヌ語の表記についてまとめた論文としては、切替（1997: 1998）や中川（2006）がある。

切替（1997）では、旭川・近文の砂沢クラが筆録した『クスクップオルシベ』（1983年、みやま書房）における表記の詳細な分析を中心に、アイヌ自身によるアイヌ語の表記についてまとめている。

また、切替（1998）では、アイヌ語十勝方言話者の沢井トメノが1983～1984年頃にカ

タカナで書いたアイヌ語テキストの表記法について、「アイヌ語話者が、アイヌ語の音を仮名で表記するときに生ずる問題をどのような工夫でもって独自に乗り越えて行ったか」という点について「アイヌ語学上、従来あまり取り上げられてこなかった問題」(p.149)だとして分析している。

中川(2006)では、近代以降のアイヌ語表記の変遷を、ローマ字表記・カナ表記ともに詳細にまとめており、本稿で扱う鍋沢元蔵による表記についても言及している。ここでは、阿寒の山本多助が中心となって発行したアイヌ語同人誌『アイヌ・モシリ』(1957(昭和32)～1965(昭和40)年)における鍋沢の表記の特徴について、以下のように記述している。

caをザ、ceをぜのように表記する(この表記自体は江戸時代からある)。tuはヅで書いたりト°で書いたりしている。さらに特徴的なのはエ°という表記で、ruwe「こと」をルエ°、moymoye「動かす」をモイモエ°で表記しているところを見ると、we、yeの音節をあらわしているようにも見えるが、wen「悪い」をウエ°ン、tuye「切る」をト°イエ°とも書いているので、エの前に何か「わたり」の要素が感じられる場合に、エ°と表しているということだろう。

『アイヌ・モシリ』の表記で山本・鍋沢の両者に共通している点は、p-, t-, k- について、清音も濁音も両方用いていること、-p, -t, -k, -s, -m に対しては小文字による表記を行っているが、r は大文字で書かれており、rV との区別がないこと。一方で、-pp-, -kk- などはチカッポ(cikappo「小鳥」)、ワッカ(「水」)のように書き、チカッポ、ワッカのような促音表記をしていないことなどが挙げられる。(p.26)

この『アイヌ・モシリ』における鍋沢の投稿を見ると、6巻(1959(昭和34)年4月27日)掲載の新年の挨拶「アシリバ オッタ イランカラ ヲイタキ」、9巻(1960(昭和35)年4月15日)掲載の散文説話「サンテクリ」、12巻(1963(昭和38)年1月1日)掲載の伝説「アオヤモクテ・ユーカラ」、散文説話「イクレスイエ・イソイタク」、17巻(1965(昭和40)年5月15日)掲載の英雄叙事詩「イモンカオヤンマツ」ならびに18巻(1965(昭和40)年6月15日)掲載の英雄叙事詩「ポイヤウンベ」がある。

6巻掲載の挨拶には1959年1月1日、9巻掲載の散文説話には1960年2月、12巻掲載の散文説話には1962年11月という年月が、それぞれのテキスト末尾に記載されている。いずれも各巻の発行年月日より多少早いことから、鍋沢が各テキストを筆録した(し終えた)時期を表すものであろう。一方、英雄叙事詩2編については『アイヌ・モシリ』本誌にはこうした年月日の記載がない。だが、『アイヌ・モシリ』所収の英雄叙事詩はいずれも、門別町郷土史研究会から1969年に公刊されている『アイヌの叙事詩』に所収の「IMONKA-OYAN-MAT(トリカブト姫)」ならびに「HURI HAYOKPE(鶯鑑)」とまったく同じ内容となっており、アイヌ語の表現もほぼ同一である³⁾。一言一句にいたるまで一致するわけではないが、違いは細かい表現に留まり、異なるタイミングで筆録した

テキストだと考えるには相違点が少ない⁴⁾。たとえば「IMONKA-OYAN-MAT」の出だし部分は、以下のように2種類の刊行物において、テキストが一致している。

『アイヌ・モシリ』 (1998: 429)	『アイヌの叙事詩』 (1969: 407)	和訳 (『アイヌの叙事詩』版)
ランケ・カンド	Ranke kanto	下の天を
エブンキネ・クル	epunkine kur	支配している神は
アコロ・ユビ	akor yupi	私の兄上
ネルウヱネ	ne ruwene.	なのである。
タバン・イヌマ	Tapan inuma	この宝壇が
ランベシ・クンネ	ram-pes kunne	低い丘の如く
チシドリレ	chisiturire	ずっと延び
エンカシケヘ	enkasikehe	その上に
ニシパ・ムツベ	nispa mutpe	勇士の太刀
オツサンプサ	otusan pusa	あまたの垂れ房が
オウカ オマ	o-uka-oma	相い重なり
ウコプサ・クル	u-kopusa kur	互いに房の影が
スイバカネ	suypa kane,	ゆれている,

したがって、『アイヌ・モシリ』と『アイヌの叙事詩』とは同一の筆録ノートを元にしたテキストであり、細かい表現の相違は『アイヌの叙事詩』編集時に加えられた修正・変更点であろう。

『アイヌの叙事詩』に記載された情報によると、「IMONKA-OYAN-MAT」は「昭和40年3月13日」、「HURI HAYOKPE」は「昭和38年3月20日」の筆録ノートを、それぞれもとにしている。そのため、『アイヌ・モシリ』をもとにまとめられている中川(2006)による鍋沢の表記の特徴は、およそ昭和35~40(1960~1965)年頃にかけてのものだと言える。

一方、民博所蔵ノートは、前述のように昭和3(1928)年、昭和29(1954)年、昭和34(1959)年に筆録されている。そのため、『アイヌ・モシリ』よりも前の時代における鍋沢の表記体系ならびに表記の変遷を知ることができる資料となっている。

5 民博所蔵ノートにおける表記体系

民博所蔵ノートにおける表記体系を、誤字・脱字の可能性が考えられる用字を除いてまとめると、表1のようになる。

小さく書かれている文字は直後に（小）を入れた。それ以外はすべて、大きく書かれている文字である。また、各表記はおおよその出現度合いが高い順に並べており、（ ）内に入れているものは、各テキストに1～数例ほどしか見られない表記である。「—」は当該テキストにおいて、その音素・音節が登場しないことを表す。

表1 国立民族学博物館所蔵ノートにおける鍋沢元蔵の表記

音素	音素・音節	Nabesawa-1 yukar (昭和3年)	Nabesawa-1 kamuyyukar (昭和3年)	Nabesawa-2 kamuyyukar (昭和3年)	Nabesawa-3 yukar (昭和29年)	Nabesawa-4 inonnoitak (昭和29年)	Nabesawa-5 yukar (昭和34年)
a	a	ア	ア	ア	ア	ア	ア
e	e	エ/(エ)	エ	エ	エ	エ/(エ)	エ/エ
i	i	イ	イ	イ	イ	イ	イ
o	o	オ/(ヲ)	オ	オ	オ/(ヲ)	オ	オ
u	u	ウ	ウ/(フ)	ウ	ウ/(フ)	ウ	ウ/(フ)
p	pV	パ行	パ行	パ行	パ行/パ行	パ行	パ行/パ行
	-p	プ/ (プ(小))/ (ッ)	プ/ (プ(小))	プ/ (プ(小))	プ	プ/(ッ)	プ/プ(小)
	-p(p)-, -p(k)-, -p(t)-	ッ(小)/プ	—	プ/ッ(小)	ッ(小)/ ッ/プ	—	プ(小)/プ /ッ(小)
t	ta, te, to	タ行/(ト)	タ行	タ行	タ行/(ダ) /(ト)	タ行/(デ)	タ行/タ行
	tu	ド/ト/ (ツ)/ (ヅ)	ド/ト	ド/(ト)	ド/ト	ド/ト	ド/ト
	-t	ッ(小)/ツ	ッ(小)/ツ	ッ(小)/ツ	ツ/ッ(小)	ッ(小)/ (ツ)	ツ/ッ(小)
k	kV	カ行	カ行	カ行	カ行	カ行	カ行
	-k	ク/ (ク(小))	ク	ク/ク(小)	ク/ッ(小) /(グ)	ク/ (ク(小))	ク/ク(小) /(ッ(小)) /(ック)
	-k(k)-, -k(t)-	ッ/ク/ (ク(小))	ク	ク/ッ(小) /ク(小)	ク/ッ(小) /(ツ)	ク/ (ッ(小))/ (ク(小))	ク(小)/ (ッ(小))/ ク
c	ca	サ/(サ)	サ	サ/(チヤ)	サ	サ	サ/(サ)
	ci	チ/(シ)	チ	チ	チ/(ジ)	チ	チ
	cu	チュ/チュ /(ツ)	—	チュ/ツ/ チュ	ツ/(ツ)	—	ツ
	ce	ゼ	—	—	ゼ	ゼ	ゼ
	co	ゾ	—	—	ゾ	—	ゾ
m	mV	マ行	マ行	マ行	マ行	マ行	マ行
	-m	ム/ン	ム/ン	ム/ン	ム/ン	ム/(ン)	ム/ン
n	nV	ナ行	ナ行	ナ行	ナ行	ナ行	ナ行
	-n	ン	ン	ン	ン	ン	ン

s	sV	サ行	サ行	サ行	サ行	サ行	サ行
s	-s	シ/ス	シ	シ	シ/(ス)	シ/(ス)	シ/(ス)
	-s(s)-	ッ(小)/シ	—	—	(表記なし) /シ	ッ(小)	ッ(小)/シ
h	hV	ハ行	ハ行	ハ行	ハ行	ハ行	ハ行
r	rV	ラ行	ラ行	ラ行	ラ行	ラ行	ラ行
	(-a)r	ラ/ル	ラ/ル	ラ/ル	ラ/ル	ラ/ル	ラ/ル
	(-i)r	リ/(ル)	リ	リ/(ル)	リ/(ル)	リ	リ
	(-u)r	ル	ル	ル	ル	ル	ル
	(-e)r	ル	ル	ル	レ/ル	ル	レ/ル
	(-o)r	ロ/ル	ロ/ル	ロ/ル	ロ/ル	ロ/ル	ロ/ル
w	wa	ワ	ワ	ワ	ワ	ワ	ワ
	wi	—	—	—	—	—	—
	we	ヱ/エ/エ /ウヱ	ヱ/ウヱ/ エ/エ	ヱ/エ/エ	ヱ/エ/(ウ エ)	ヱ/(エ)	ヱ/エ/ヱ /(ヘ)
	wo	ヲ/(ウヲ)	ホ	ヲ	ヲ	—	ヲ
	-w	ウ/(フ)	ウ/(フ)	ウ	ウ	ウ	ウ/(フ)
y	ya, yu, yo	ヤ行	ヤ行	ヤ行	ヤ行	ヤ行	ヤ行
	ye	イヱ/ヱ/ (イヘ)	イヱ/ヱ	イヱ/ヱ	イヱ/ヱ/ イエ/エ	ヱ/(イヱ)	ヱ/イヱ/ (イエ)/ヱ /(イエ°)
	-y	イ/(ヒ)	イ	イ	イ/(ヒ)	イ	イ/(ヒ)

以下、ノートごとの違いや、そこから見える表記体系の変遷についても着目しながら、それぞれの音素ならびに音節について見ていく。

5.1 母音 a, e, i, o, u

母音の表記に対しては、ア・エ・イ・オ・ウが基本的にはそのまま使われている。だが、e と o については、若干の揺れが見られる。

e については、Nabesawa-1・2では、エネイタキ⁵⁾(ene itak hi「このように」)など、ほぼエのみが用いられている。また、Nabesawa-5でも、エネイタクヒ (ene itak hi) のようにエが使われることが多い。しかし、Nabesawa-3・4では、エネイタキ (ene itak hi) のように、ほぼエが用いられ、エとエとの使用頻度が逆転している。したがって、e の表記については、エ → エ → エ という変遷となっている。

o に対しては、すべてのノートにおいて、オカアンヒケ (oka=an hike「暮らしていたが」) のように、基本的にオが用いられているが、少数ながらヲが使われる例もある。o として使われるヲは、ヤマブカムイ (yaomap kamuy「岸を打つ大波」) (Nabesawa-1) のように、母音(特に a) の直後に来る o に対して充てられることが多い。そのため、ヲは母音連続を避けるための何らかのわたり音⁶⁾を伴っている音に対して使われている

可能性も考えられるが、使い分けの詳細は不明である。あるいは、エとエの場合と同様に、o に対するオとヲについての明確な使い分けはないものの、後述のようにヲが主に wo を表す文字として用いられていることもあり、wo と o との混同を避けるために o に対してヲを充てることをできるだけ避けているという可能性も考えられる。

u は、基本的にウで表記されているが、ポイヤフンベ (Poyyaunpe「ポイヤウンベ」) のように、フで表記されることもある。これは、Nabesawa-1・3・5で確認できるため、どの年代においても同じ傾向にあると言える。ただし、このフはいずれのノートでも Poyyaunpe という語にはほぼ限定された表記である。このほかには、アエラフンクチ (a=eraunkuci「私の喉の奥」) が Nabesawa-1 と Nabesawa-5 において 1 度ずつ確認できるように留まる。後述 (5.2.9) のように、w に対してハ行が充てられることもあることから、フは u の表記の揺れというより、a + u という母音連続を避けるための「わたり音 + u」といった、u とは異なる音価を表している可能性も考えられる。ただし、フの表記が特定の語のみに現れることから、単なるわたり音をあらわすという説明は難しく、その使い分けについては今後のさらなる分析が必要になる。

5.2 音節頭にくる子音の表記

アイヌ語の音節構造は、前述のとおり、(C₁) V (C₂) であるが、C₁ と C₂ とでは、同じ音素であっても表記に若干の違いも見られる。そこで、まずは子音のうち、音節の頭にくる場合の表記について記述する。すなわち、CV という音節構造がどのように表記されているかを見ていく。

5.2.1 pV, tV, kV

pV は、タパンベパテク (tapanpe patek「こればかり」) (Nabesawa-2)、カンピクルカ (kampi kurka「紙の上」) (Nabesawa-4) のようにバ行での表記と、アコロユピ (a=kor yupi「私の兄」) (Nabesawa-5)、アヤイコユプ (a=yaykoyupu「私はぎゅっと結んだ」) (Nabesawa-3)、セコロオカイペ (sekor okay pe「～ということ」) (Nabesawa-5) のようなバ行での表記とが見られる。

しかし、Nabesawa-1・2・4では、バ行のみが使われている。また、バ行での表記もなされている Nabesawa-3・5でも基本的にはバ行が多く使用されている。したがって、全体的な傾向としては、Nabesawa-3 以降ではバ行が使われることもあるものの、初期から一貫して、基本的にはバ行が使われるとまとめることができる⁷⁾。

なお、Repunsirunkur「レプンシリの人」に対して、レプンシルクルという表記もレプンシルクルという表記も見られる (Nabesawa-5) ように、同じ語句に対してバ行・パ行の双方が使われている例も確認できることから、バ行とパ行の使い分けはなされていないようである。

次に tV⁸⁾ は、基本的にはシネアントタ (sineantota 「ある日に」) (Nabesawa-1), テルケネワ (terke ne wa 「跳んだり」) (Nabesawa-5) のようにタ行で書かれているが、少数ながらダ^ンパネバ (tanpa ne pa 「今年あたり」) (Nabesawa-5), イワンロクン^デウ (iwan rokuntew 「6 隻の戦艦」) (Nabesawa-5), シレ^ドク (siretok 「美貌」) (Nabesawa-1) のようにタ行で書かれている個所も見られる。Nabesawa-1 では、タ行の文字としてはドのみが使われているが、Nabesawa-3 や 4 ではダやデも見られるようになる。Nabesawa-5 になると、基本的にはタ行が使われているものの、タ行が使われる例も増えてくる。したがって、基本的にはタ行が使われているものの、徐々にタ行が使われる頻度も増えていく傾向にあると言える。

kV についても tV と同様に、イエンカ^シケ (i=enkasike 「私の上で」), アナ^ツキコロカ (anakikorka 「けれども」), ランベシ^クンネ (ranpes kunne 「低い崖のように」) (いずれも Nabesawa-5) のように、カ行による清音表記である。ガ行による表記は、後述 (5.3.1) のように、音節末子音 -k の表記として 1 例が確認できるのみで、kV にガ行は使われていない。

以上をまとめると、pV については濁音表記 (パ行) が、tV, kV については清音表記 (タ行・カ行) が Nabesawa-1 から用いられており、その傾向は Nabesawa-5 に至るまで変わらない。だが、Nabesawa-3 からは徐々にではあるが、半濁音表記 (パ行) や濁音表記 (ダ行・ガ行) も見られるようになり、Nabesawa-5 になるとそれがさらに増えてくる。

そして、『アイヌ・モシリ』においては「p-, t-, k- について、清音も濁音も両方用いている」(中川 2006: 26) とのことなので、年月が経つにしたがって、清音と濁音を両方用いる割合が高くなってきていると言える。

5.2.2 tu

tu は現代日本語にはない発音だということもあって、日本語カナ表記体系ではこの音を 1 文字で表すことができない。そのため、鍋沢に限らず、アイヌ語表記においては様々な表記の工夫がなされる音のひとつである。

民博所蔵ノートにおいては、基本的には、ドピリカクニ^プ (tu pirka kuni p 「2 つのよいこと」) (Nabesawa-3) のように tu はドで書かれている。だが、トレシレス^ワ (turesi resu wa 「妹を育てて」) (Nabesawa-1) のようにトが用いられている例も少なからず見られる。

ドムンチカムイとトムンチカムイ (tumunci kamuy 「魔神」) (いずれも Nabesawa-3) や、ドマムソカシ/トマムソカシ (tumam so kasi 「体の上」) (いずれも Nabesawa-5) のように、同じ語においてもド・トがともに使われることがあることから、ドとトとの使い分けは特になされていないようである。これは、すべてのノートに共通している。ただし、Nabesawa-1 においては、それぞれ 1 例ずつだが、サ^ツバシクンネ (satupas kunne

「雪山のように」), ナンヅイヰレ (nantuyere「じっと見つめる」) のように, ツヤヅが使われている個所が見られ, 筆録の初期の段階では tu にあたる文字をド以外にいくつか試用していた様子がうかがえる。

『アイヌ・モシリ』においては「tu はヅで書いたりドで書いたりしている」(中川 2006: 26) とあるが, 上記のように初期を除くと, 基本的に鍋沢は tu についてはドで書くという表記を採用している。そのため, 鍋沢は『アイヌ・モシリ』において用いられているヅやドをもともと使用していたのではなく, Nabesawa-5 の筆録時期の後, すなわち1960 (昭和35) 年以降から使うようになったと考えられる。特にヅについては, 鍋沢とも交流があった金田一京助が使用していたこともあり, 金田一ら研究者との交流が表記の変化に影響を及ぼしたとも考えられる。

5.2.3 cV

『アイヌ・モシリ』では, 「ca をザ, ce をぜのように表記」(中川 2006: 26) している。民博所蔵ノート5冊においても同様に, ca はザ, ce はぜで表記するのが基本である。また, co についても同じようにザ行を用いてゾで表記されている。

ce, co については, ゼブルバケ (cep rup pake「魚の群の先頭」) (Nabesawa-5), イエヅクヌレ (i=ecoknure「私にキスをする」) (Nabesawa-3) のように, それぞれゼ・ゾという表記のみが用いられているが, ca については揺れもある。Nabesawa-1 と Nabesawa-5 には, アムクサルドイヰ (a=mukcartuye「胸元を斬られる」) (Nabesawa-1), サシテクサムン (casi teksam un「山城の近くへ」) (Nabesawa-5) と, それぞれ1例ずつ, サで書かれている個所がある。しかし数として少ないことや, サは基本的に sa の表記として使われていることから, ca に当たる表記としてサも採用していたというより, ザを意図しつつも濁点が落ちてしまった可能性が高い。また, 1例のみだが Nabesawa-2 では, ヤクチヤロ (ya kutcaro「網の入り口」) という, ca に対してチヤが用いられている例も見られる⁹⁾。

ci については, イヨチウンクル (Iyociunkur「イヨチの人」) (Nabesawa-5) のように, 基本的にチで書かれている。だが, 1ヶ所のみ, ca, ce, co と同様にザ行を用いてジで書かれた, イジウオプクンネ (iciwop kunne「投げ槍のように」) という例も Nabesawa-3 に見られる。さらに, ジの濁音が落ちた形式であるシで書かれている個所も, シセタドレシ (cisetatures「家にいる妹」) (Nabesawa-1) のように, 1例見られる。

また, -tci については基本的にツチで書かれているが, Nabesawa-5 では, オアツニヒ (oatcinihi「片足」), ネアオツケ (nea otcike「そのお膳」) のように-tci をッで書いている例が見られる。だが数が少ないことから誤記の可能性も高いだろう。

cV のなかで特に揺れが大きいのは cu である。Nabesawa-1 においては, シチュユッカネヒ (sicupka ne hi「真東」) のようにチユが優勢である。また, シチュユッカネヒ (sicupka

ne hi「真東」)のように、チュが使われている場合もある。ここにあげた例のように、同じ語句において用いられていることから、両者の使いわけは特にないようである。チュ、チュのほかにもツも cu の表記としては用いられているが、Nabesawa-1では1例のみ(アITALコツプ a=itarkocupu「私はござで包む」)しか見られない。

Nabesawa-2になると、チュ、チュに並んでツも確認できるようになる。そしてさらにNabesawa-3以降は、シツブカネヒ(sicupka ne hi「真東」)のようにツが使われるほか、モシリヅブボキ(mosir cuppoki「国の西」)のようにツも少数ながら使われ、チュあるいはチュという表記は見られなくなる。

以上のように、Nabesawa-1・2ではcuにチュ/チュを主に用いていたものの、徐々にそれが使われなくなっていく。

旭川・近文の砂沢クラの表記を分析した切替(1997)では、「砂沢氏は一般に拗音の仮名は使わない」(p.101)ことから、cuに対しツ、ヅ、ヅが用いられている理由を、アイヌ語に「口蓋化・非口蓋化の対立がない」ために「破擦音を含むことで共通するチュとツのうち、直音のツが用いられた」と推測している(pp.101-102)。

さらに、「日本語のザ行の子音は、語頭にあって有声破擦音である」という性質を「アイヌ語の破擦音に利用した」ために、caやceを示すために「類似する破擦音」としてザやゼを用いた(切替 1997: 102)と分析している。

鍋沢の表記においても、チュ/チュという2文字による表記から1文字による表記に移行する際にツが採用された理由や、caやceにおいてザやゼが用いられていた理由としては同様のことが考えられ、これについて中川(2006)では「アイヌ語母語話者の共通した感覚なのではなかろうかとも考えられる」(p.27)と述べている。

5.2.4 mV, nV

mV, nVは、すべてのノートにおいて、タンカムイマウ(tan kamuy maw「この神風」)、ミナカネ(mina kane「笑いながら」)、エムシメクカ(emus mekka「刀の峰」)、アオモンモモ(a=omommomo「かくかくしかじかである」)、ホプニヌイネ(hopuni nuy ne「舞い上がる炎のように」)、メノコソネ(menoko sone「女に違いない」)(いずれもNabesawa-3)のように、それぞれマ行、ナ行で表記されている。

5.2.5 sV

sVは、すべてのノートにおいて、ザシテクサム(casi teksam「山城のそば」)、シバセカムイ(sipase kamuy「本当に重い神」)、ソモスイクスン(somo suy kusun「まさか」)(いずれもNabesawa-3)のようにサ行(サ、シ、ス、セ、ソ)で書かれ、シャ、シュ、シェ、シヨのようなシャ行では表記されない。

ただし、『アイヌ・モシリ』においては、エムコ・クシュ ザシ・ウブシヨロ(emko

kus(u) casi upsoro「そのために 城の内部は」(釧路アイヌ文化懇話会 1998: 430) のように、シャ行表記が見られるようになる。この変化にかんしては、鍋沢と交流のあった金田一京助がウアショロ (upsoro) のような表記もしている (中川 2006: 7) ことの影響も考えられる。

5.2.6 hV

hV は、ネフラハ (ne huraha 「その匂い」), ウタリヒ (utarihi 「仲間たち」), ヘトボホルカ (hetopo horka 「逆に, 反対に」) (いずれも Nabesawa-5) のようにハ行で書かれる。

中には、アエオリカバシテ (a=ehorkapaste 「敗走させられる」) (Nabesawa-1), アロリカシ (ar horikasi 「真上から」) (Nabesawa-3) のように h- が落ちた表記がなされている例もあるが、これは hV の表記というより音韻交替によって h- が落ちた発音をそのまま記した可能性が高い。

5.2.7 rV

rV はいずれのノートにおいても、アエラミシカリ (a=eramiskari 「私はわからない」), オカルルズネ (oka ruwe ne 「いるのだ」), レプタロクカムイ (rep ta rok kamuy 「沖に座す神」) (いずれも Nabesawa-1) のように、ラ行で書かれる。

5.2.8 wa, ya, yu, yo

すべてのノートにおいて、wa はワ, ya, yu, yo はそれぞれヤ, ユ, ヨで表記されている。たとえば、オロワネシ (orowa nesi 「それから」), アヤイコユブ (a=yaykoyupu 「私はぎゅっと結ぶ」) (いずれも Nabesawa-2), カムイハヨクベ (kamuy hayokpe 「立派な鎧」) (Nabesawa-3) のように表記される。

5.2.9 we

いずれのノートにおいても、we を表す際に最も多く使われている表記は、ヱである。たとえば、アキルヱ (a=ki ruwe 「私がしたこと」) (Nabesawa-5) などの用例が見られる。

しかし、we は揺れが多く、ヱ以外にも、アネルエネ (a=ne ruwe ne 「私であるのだ」) (Nabesawa-1), イタコハエ (itako hawe 「言ったこと」), (Nabesawa-3) のようにエやエが使われる例はしばしばある。特に、ruwe, hawe や wen などではエを用いている場合も多い。

また、ネアウヱンレラ (nea wen rera 「例のひどい風」) (Nabesawa-1), ホラオチウエ (horaociwe 「サッと落ちる」) (Nabesawa-3) のように、ウヱやウエが充てられている例も確認できる。しかし、全体の数としてはそれほど多くない。

また、1 例のみ、ヘンルブネマチ (wen rupne mat 「悪い老女」) (Nabesawa-5) とい

う、we に対してへが使われている例が見られる。

そして、Nabesawa-5になると、アキルヱネ (a=ki ruwe ne「私はしたのだ」)、アエンマツネボ (a=wenmatnepo「私の悪い娘」)のように、ヱという表記が使われるようになる。Nabesawa-5の前半は基本的に、ヱあるいはエのいずれかが使われているが、後半(1000行目付近以降)からヱが中心に使われるようになり、ヱからヱへの交替が確認できる。中川(2006)では『アイヌ・モシリ』において用いられる「ヱという表記」を鍋沢の特徴だとしている(p.26)が、民博所蔵ノートを見ると、このヱという特徴的な表記を使い始めたのは、1959(昭和34)年という比較的、新しい年代になってからであることがわかる。

5.2.10 wo

基本的には、どのノートにおいても、ホラヲチヱ (horawociwe < horaociwe「サツと落ちる」(Nabesawa-1)のように、wo はヲによって表されている。

ただし、1例ずつではあるが、ウヲロラッキブ (wororatkip「ともがい」)とレブンイホリソ (repun iwor so「沖の彼方」)(ともにNabesawa-1)という表記が見られる。後者は、we に対してへが充てられていたのと同様に、w に対してハ行を用いた表記となっている。これらは、いずれもNabesawa-1に限られることから、初期にはwoの表記に若干の揺れと試行錯誤があったものの、ヲに統一してからは、それが固定したと言える。

なお、ウオという表記も見られるが、ノチウオカント (nociw'o kanto「星の天」)(Nabesawa-3) (<nociw「星」o「～にある」)や、シアウオラヱ (siaw'oraye「中に入ってくる」)(Nabesawa-3) (<si-「自分」aw「中」o-「〈場所〉に」raye「～を行かせる」)のように、形態素分析において分節できる個所において使われていることから、これらはi + wo, a + woではなく、それぞれ(noc) iw + o, aw + oという形態素境界が意識されていることによる表記だと解釈した。

5.2.11 ye

yeの表記としては、アヱロク (a=ye rok「言われた」)(Nabesawa-1)、アハンケドヱブ (a=hanketuye p「私が近く切るもの」)(Nabesawa-5)のように、weと同じくヱが多く使われている。このほか、アイヱルエネ (a=ye ruwe ne「私が言ったのだ」)、ドイマドイヱブ (tuymatuye p「遠く切るもの」)(いずれもNabesawa-1)のように、イヱも多く使われている。特にNabesawa-1・2ではイヱが多く見られ、yeの基本的な表記として使われている。また、ここで挙げた例のように、同じ単語に対して2種類の表記がされていることから、イヱとヱとで使い分けは特にはないようである。

このほか、稀に見られる表記としては、Nabesawa-1では、アコエタイへ (a=koetaye「引き上げられる」)(Nabesawa-1)のようにイへが使われることもある。また、Nabesawa

-3では、エロクアワ (ye rok awa「言ったが」) やネブカムイエ (nep kamuye「何の神」) のように、エやイエを用いている個所もいくつか見られる。

さらにNabesawa-5になると、このほかに、イノヱノイネ (i=noye noyne「私の身がねじれるように」) やヱルエネ (ye ruwe ne「言ったのだ」) あるいはコシエダイヱ (kosietaye「去る」) のように、ヱ、あるいは少数ながらイヱという表記が見られる。Nabesawa-5の前半は基本的に、ヱやイヱのいずれかが使われているが、後半(1000行目付近以降)からヱの表記が中心に使われるようになり、ヱからヱへの交替が確認できるのはweと同じ傾向である。

5.3 音節末子音の表記

続いて、音節末子音すなわち C_1VC_2 という音節構造において C_2 に位置する音がどのように表記されているかをまとめる。

鍋沢のようなアイヌ語の母語話者にとっては、あくまでも閉音節 CVC でひとつのまとまりであり、 C_2 だけを単独で取り上げるという分節の仕方は不相当とも考えられる。しかし本稿では、表記の体系を簡潔に記述するにあたっての便宜から、音節末子音 C_2 の表記という取り上げ方をする。

5.3.1 -p, -t, -k

音節末子音 -p は全ノートを通じて、チプヌイヱ (cip nuye「船に彫刻する」)、レピリカクニ プ (re pirka kuni p「3つのよいこと」) (ともにNabesawa-1) のように、プで書かれることが多い。このほかには、アキッネコロカ (a=ki p ne korka「私はしたのだが」) (Nabesawa-1) のように、小さく書かれている濁音ッも用いられているが、これはNabesawa-1・2では用例が少なく、Nabesawa-3・4では確認することができない。また、アキッ プネコロカ (a=ki p ne korka「私はしたのだが」) (Nabesawa-1) のようにッで書かれている例も少数ながら見られる。これはいずれのノートにおいてもプという濁音表記のみである。

ッのように音節末子音を小文字で書くこと自体は「永田方正(1891)『北海道蝦夷語地名解』あたりから始まっている」(中川 2006: 7) ため、鍋沢独自の表記ではない。さらに、金田一京助も小文字のカナを使っていたため、鍋沢が小文字を書くようになったのは金田一の影響による可能性が高いだろう。

-pp-の場合には、チカッボサイネ (cikappo say ne「小鳥の群のように」) (Nabesawa-3) のように-pと同じくッあるいはッが使われることもあるが、タクッベネ (takuppe ne「谷地坊主として」) (Nabesawa-3) のようにッが用いられることも多い。これは、-pk-, -pt-の場合も同じで、シチッカネヒ (sicupka ne hi「真東」)、ケマットクンネ (kem apto kunne「血が雨のように」) (いずれもNabesawa-1) などの例がある。しかし、ッ

は -pp- においては見られない。

次に、音節末子音 -k は、タネアナクネ (tane anakne 「今は」) やフチイタク (huci itak 「祖母の言葉」) (いずれも Nabesawa-1) のようにクが用いられることが多い。また、後述 (6.5) のように、クに-i 音が挿入されたキという表記もしばしば見られる。

小文字のクについては Nabesawa-1 の時点で、シレトクオロケ (siretok'orke 「美貌」) (Nabesawa-1) のように確認することができる。ただし、この小文字クは Nabesawa-1・2・4 において、それぞれ見られるものの、数としては多くはない。比較の数が多く見られるようになってくるのは、Nabesawa-5 になってからである。また、Nabesawa-5 ではイエオリバックワ (i=eoripak wa 「私を敬って」) のように、ックを使った表記も見られる。

このほかに 1 例のみだが、ゴロクイタグ (ye rok itak 「言った言葉」) というガ行を用いた表記や、キクナタラ (kiknatara 「カチリと鳴る」) (Nabesawa-3), エニベッオマ (enipek'oma 「光り輝いている」) (Nabesawa-5) のように、ッで-k を表す例も少ないながら確認できる。

もっとも、ッが使われるのは、シヌマネヤクカ (sinuma ne yakka 「彼もまた」) やネラボッタ (ne rapok ta 「その間に」) (ともに Nabesawa-1) のように -kk- や -kt- の場合が多い。ただし、-kp- の場合にッは用いられず、フレハヨクベやフレハヨクベ (hure hayokpe 「赤い鎧」) (いずれも Nabesawa-5) のようにクやクが用いられている。

また、Nabesawa-1~4 では -kk- に対しても -k と同様にクが多く使われているが、Nabesawa-5 では -kk- に対してクはあまり使われず、クやッの使用頻度が高くなる。

以上に見たように、大文字が基本的に使われるものの、小文字も併用される点、-pp-, -kk- などの促音表記においては各大文字・小文字に加えてッも多く使われる点、またッブやックは -pp-, -kk- には使われない点などのように、-p, -k とでは表記に似た傾向が見られる。

一方、音節末子音 -t は、-p, -k ほど多種の文字は使われていない。全ノートを通じて、ホッケキワ (hotke ki wa 「横になって」) (Nabesawa-1) のようにッが用いられている場合が多い。また、カツコロカネ (katkor kane 「変わりなく」) (Nabesawa-1) のように少数ながら、ッが用いられている場合もある。チアマソツキ (ciamasotki 「寝かされた寝床」) とソツキカワ (sotki ka wa 「寝台の上から」) (いずれも Nabesawa-3) のように、同じ単語についてツとッの両方の表記が見られることから、この両者の使い分けは特にないようである。また後述 (6.5) のように、-i 音が挿入されてソヤウンマチ (Soyaunmat 「ソヤの女」) (Nabesawa-1) のようにチで書かれている例も見られる。

5.3.2 -n, -m

音節末子音 -n は、すべてのノートにおいて、ソンノボカ (sonno poka 「なるほど本

当に]) (Nabesawa-2) のようにンで表記されている。なお、-nについては、ポイヤウンペ (Poyyaunpe 「ポイヤウンペ」)、コシプトノ (kosimpu tono 「コシンプの首領」) (いずれも Nabesawa-5) のように、該当する表記がされていない場合もしばしば見られるが、脱字の可能性も高い。

音節末子音 -m は、いずれのノートにおいても、シサムニシバ (sisam nispa 「和人の首領」) (Nabesawa-4) のように、基本的にはムで書かれている。だが、ランマカネ (ramma kane 「いつも」) (Nabesawa-2) のようにンで表記される例も少なくない。これは5冊のノートすべてに共通する傾向である。ンとムとの詳細な使い分けについては不詳で、ドマムソカシとドマンソカシ (tumam so kasi) (いずれも Nabesawa-3) のように、同じ語句について、ムとンの双方の表記が見られることもある。

なお、実際には tapanpe patek 「これだけ」や wen munpana 「ひどい塵ほこり」、kasre tampiri 「浅い刀傷」などのように直後に p あるいは m がくる場合は、「m と n は中和され、[m] のみが立つ」(田村 1988: 13) という発音がなされる。しかし、実際の発音が [m] であっても、エタマムバ (etamanpa 「刀で戦っている」) (Nabesawa-3) のようにムで書かれている例はごくわずかで、-mm- や -mp- においてはンが充てられることが多い。これは、wen 「悪い」、mun 「ごみ」のように形態素レベルにおいて-nである場合でも、tam 「刀」のように-mとなる場合であっても同じで、いずれもエンムンバナ (wen munpana 「ひどい塵ほこり」)、カシレタンビリ (kasre tampiri 「浅い刀傷」) (いずれも Nabesawa-3) のように表記されている。

また、中川 (2006) によると、『アイヌ・モシリ』においては「-p, -t, -k, -s, -m に対しては小文字による表記を行っている」(p.26) が、民博所蔵ノートにおいて、-m については小文字での表記は見られない。

5.3.3 -s

音節末子音 -s について『アイヌ・モシリ』では「-p, -t, -k, -s, -m に対しては小文字による表記を行っている」(中川 2006: 26) が、民博所蔵ノートにおいて、-s には小文字は使われず、si あるいは su と -s との区別は、表記上はなされていない。

民博所蔵ノートにおいて、-s はアシカイカシバ (askay kaspa 「器用すぎる」) (Nabesawa-1) のように、多くはシで表記される。シニスカント (sinis kanto 「本当の天」) (Nabesawa-3) のように、スが用いられている例は少ない。

ただし、-ss-となる場合には表記もやや異なる。オニシサクレラ (onissak rera 「雲なしの風」) (Nabesawa-1)、ザシラシサムン (casi ras sam un 「山城の割木の柵のそばへ」) (Nabesawa-5) のように、シが使われている例もあるが、多くはウツシウウタラ (ussiw utar 「召し使いたち」) (Nabesawa-1) のように、ッで表記されている。

また、Nabesawa-3においてはチウテキウシウ (ciwtek ussiw 「召し使い」) のように、

-ssi- をシと書き, -s の部分が表記に反映されない書き方が基本的になされており¹⁰⁾, -s の部分が反映されているのはケナシソカシ (kenas so kas 「木原の上」) の1例のみである。

なお, 「～なので, ～ために」という原因・理由を表す接続助詞 kusu / kus は最後に母音を伴う語形と伴わない語形の両方の語形があるが, 上述のように-s はほぼシで書かれているという傾向が見られることから, 接続助詞 kusu / kus については, クスであれば kusu, クシであれば kus を想定していたものと解釈できる。

5.3.4 -r

アイヌ語カナ表記において, 音節末子音-r には, 大きく2つのパターンがある。ひとつは, 直前の母音による声帯の振動がまだ続いていて「次の音節に移る前に直前の母音に類似した母音が繰り返される」(切替 1997: 106) ことによって, 直前の母音の響きを伴って聞こえることから, 直前の母音にあわせてラ行 (ラ・リ・ル・レ・ロ) で書き分ける表記で, もうひとつは, すべて同じ音素 r であることから, ルで統一する表記である。

鍋沢の表記においては, 上記の表記の双方が採られ, 直前の母音にあわせてラ行で書き分けることもあれば, 母音に関わらずルで表記することもある。たとえば, kaparpe 「薄い」はカバラレベともカバルルベとも表記され, aynu terke hum 「人間が跳び下りる音」はアイヌテレケフンともアイヌテルケフムとも, a=kor totto 「私の母さん」はアコロトットともアコルトットとも表記されている (いずれも Nabesawa-5)。

ただし, 直前の母音によって, どちらの表記が優勢になるかという違いはある。-ar, -or についてはラとル, ロとルがいずれも頻繁に見られる¹¹⁾が, -ir についてはリで書かれることが優勢で, ルが使われる用例は Nabesawa-1・2・3 にそれぞれ少数の例が見られるのみである。逆に-er は Nabesawa-3・5 では terke などにレが使われるようになるが, 基本的にはルで書かれることが多い。

以上, いずれのノートにおいても, -r について小文字は使用されていない。そのため, 中川 (2006) で指摘されている, 『アイヌ・モシリ』では「-r は大文字で書かれており, rV との区別がない」(p.26) という特徴は, 民博所蔵ノートにおいても同様である。

5.3.5 -w, -y

-w は, タンカムイマウ (tan kamuy maw 「この神風」) (Nabesawa-3) のように, 基本的にウで表記されている。また, 前述 (5.1) の u と同様に, 稀にフが用いられることがある。フの表記が特定の語句に限られていることも, u の場合と同様で, -w においては, カムイマフ (kamuy maw 「神風」) やトイタクマフネ (tu itak maw ne 「2つの話し声」) (いずれも Nabesawa-1) など, maw 「風, 息」において特徴的に見られる。こ

れ以外では、ケフシタラ (kewsitara 「鳴り響く」) (Nabesawa-1) が見られるのみである。

また、-iw- は、エシッチウキワ (esitciw ki wa 「倒れ伏して」) や シウコサンパ (siwkosanpa 「シュッと鳴る」) (ともに Nabesawa-1) のように -イウ で書かれることが多い¹²⁾。萱野 (2002) では チュールイ (ciwruy 「流れが早い」) (p.316) のように、拗音 チュ を用いた表記も見られるが、これに類する表記は、Nabesawa-5 において、シユコサンパ (siwkosanpa 「シュッと鳴る」) が確認できるのみである。

次に -y は、基本的に イ で書かれる。これはすべてのノートに共通している。

-w において稀に フ の表記が見られたが、-y についても同様に、稀に イ ではなく ヒ で表記されている例が見られる。これは、イクヒベステ (i=kuypeste 「私に小便を垂れ流す」) (Nabesawa-1), キナコヒバケ / キナコヒケセ (kina koypake / kina koykese 「草むらの上 / 草むらの下」) (Nabesawa-3), ゴントヒラ (wen toyra 「ひどい土ほこり」) (Nabesawa-5) において確認できるのみで、いずれも何度も出てくる単語ではない。

6 表記におけるそのほかの特徴

ここまでは音素ごとに表記を見てきたが、これ以外にも音転写における表記の工夫にかんする特徴がいくつかある。以下では、それについてひとつずつ見ていく。

なお、以下の各節については、すべて民博所蔵ノート 5 冊、すべてにおいて共通して見られる特徴であり、年代による変化などは見られない。

6.1 音韻交替

アイヌ語においては、「形式と形式 (例えば語と語) が連続する際、音の交替 (変化) が起きる場合」(佐藤 2008: 12) があり、これを本稿では「音韻交替」と呼ぶ。たとえば、kor rusuy 「～が欲しい」はそれぞれの語の発音からコロ ルスイ [kor rusui] という発音が予想されるところだが、-r + r- という連続においては、ひとつめの -r が -n に交替するために、kor rusuy で コン ルスイ [kon rusui] と発音されるといったものである。

民博所蔵ノートにおいても、音韻交替はしばしば表記に反映されている。

アイヌ語における音韻交替の体系は、田村 (1988: 14), 中川 (1995: 4), 佐藤 (2008: 12) などにまとめられているが、民博所蔵ノートにおいては、次のような音韻交替が確認できる。

-V + hV- → -VV- : (例) ネイケ (ne hike 「～であるほう」)

-C + hV- → -CV- : (例) エネイタキ (ene itak hi 「こう言った」)

カムイヤブン (kamuy yap hum 「神が上陸する音」)

-r + n- → -nn- : (例) エキナンコンナ (e=ki nankor na 「～してくださいな」)

- r + r → -nr- : (例) アカンルズネ (a=kar ruwe ne 「私が作ったのだ」)
- r + c- → -tt- : (例) オアツニヒ¹³⁾ (oarcinihi 「片足」)
- r + t- → -tt- : (例) ドンブオツタ (tumpu or ta 「部屋の中で」)
- n + y- → -yy- : (例) ボイヤフンベ (Poyyaunpe (< pon 「若い」ya 「陸」un 「～に住む」pe 「者」) 「ボイヤウンベ (英雄叙事詩の主人公)」)
- n + s- → -ys- : (例) ビリカボイス (pirka pon su 「立派な小鍋」)
- n + w- → -nm- : (例) アイヌアフンマ (aynu ahun wa 「人が入って」)
- m + w- → -mm- : (例) シユクコトムマ (siyuk kotom wa 「立派な装いが似合って」)
- C + yV- → -CV- : (例) ネナンコラ (ne nankor ya 「～であるだろうか」)

以上の音韻交替のなかでも、～ナンコンナ (～nankor na 「～だろうよ」), ～ナンコラ (～nankor ya 「～だろうか」) のような文末表現や、～オツタ (～or ta 「～のところに」), エネイタクヒ (ene itak hi 「このようである」) などのように、何度も使われる語句は、ひとつのまとまりとして表現が固定しているためもあってか、音韻交替がそのまま表記に反映されていることが多い。

ただし、エネイタクヒ (ene itak hi) (Nabesawa-5) という書き方も多く見られるように、音韻交替を起こさないままの表記も多く見られる。

さらに、佐藤 (2008) では人称接辞 a= の直後に e または o が来る際には、アクセントがない e や o の発音が曖昧になり、それぞれ [j], [w] で発音される 「a- + e- → [aj]」 や 「a- + o- → [aw]」 という音韻交替が紹介されている (p.14) が、民博所蔵ノートにおいて、この種類の交替が表記に反映されている例は見られない。

このように、民博所蔵ノートにおいてはすべての音韻交替が表記に反映されているわけではない。だが、それは鍋沢による表記に特有の特徴ではない。アイヌ語における音韻交替自体が「規則性が高いものから低いものまで色々なものがあるが、必ずしも義務的なものではない」(佐藤 2008: 12) ため、「交替はいつでもかならず起こるわけではなく、話すスピードや間のとり方などによって起こったり起こらなかったりすることがある」(中川 1995: 4) という実際の発音におけるあり方が表記にそのまま反映された結果であろう。

したがって、民博所蔵ノートにおいては音韻交替が表記に反映されているが、それは音韻交替が起こりうる場所で機械的に交替させて記しているのではなく、実際に口に出した際の発音を想定しており、それをそのまま音転写していたと考えられる。

6.2 分節的な表記の有無

たとえば rap=an は、ラバン [rapan] のように続けて発音されることもあれば、形態素の切れ目を音節の切れ目として表示するために声門閉鎖音が挿入されて、分節的にラ

プアン [rapʔan] と発音されることもある。

民博所蔵ノートにおいては、このどちらの表記も確認できる。しかし、たとえば pon a=kor yupi 「私の小さい兄」という語句は、ボナコロユビではなく一貫してボンアコロユビと書かれている (Nabesawa-1) ように、語句によって分節的に表記されることが多い場合とされにくい場合という傾向は見られる。

必ずしもすべてに当てはまるわけではないが、おおよその傾向として、ピシタサバン (pis ta sap=an 「浜に下りる」)、エカンヒネ (ek=an hine 「行って」) (いずれも Nabesawa-1)、ラバンルゴネ (rap=an ruwe ne 「下りたのだ」) (Nabesawa-2) といった人称接辞を含む場合には分節しない表記が多く、セコロオカイベ (sekor okay pe 「ということ」) (Nabesawa-2) のように、語をまたぐ場合には分節的な表記で書かれる傾向がある。これは特に Nabesawa-1・2 で顕著に見られる傾向である。

ただし、1 語中であれば必ずしも音節末子音+母音が一音節として表記されるわけでもなく、アオサンオサン (a=osan'osan 「私は下りる」) (Nabesawa-1) といった例も見られる。また固有名詞においても、チュプオラカンクル (Cup'orakankur)、チュプオラカンマチ (Cup'orakanmat)、チュプエリキンベチ (Cup'erikin pet) (いずれも Nabesawa-2) のように分節的な表記が多く見られる。さらに、Nabesawa-5 では、人称接辞が含まれていても、エクアンコロカ (ek=an korka 「私が行ったが」) のように、人称接辞の直前で分節される用例が増えてくる。

なお、kikir 「虫」をクイキリ (Nabesawa-3・5) と表記している例が見られる。この表記にそのまま従うと、k'ikir というローマ字化がなされるところだが、アイヌ語においては /C'V/ という音節構造はない。そのため、それぞれ音節頭の子音を強く発音するようなイメージが表記に反映しているためにこのようなカナ表記になったのではないかといった推測ができる。

6.3 わたり音の挿入

前述のように、民博所蔵ノートにおける表記体系では、e, o がそれぞれエ (あるいはエ), オで表されている。そのため、形態素分析において e や o にあたる部分でヱやヲが使われている表記は、それぞれわたり音が挿入されて we あるいは ye, wo にあたる音をそれぞれ想定して表記したものと判断できる。

このわたり音の例として、金田一 (1960 (1993) : 157) では、

i-uta 「物を・搗く」 > iyuta 「搗きものをする」

などを「音韻添加」としてあげている。このように形態素分析にあたっては不要となる w や y が挿入されている場合に、本稿では「わたり音」と呼ぶ。

これを知里真志保 (1936 (1972)) では、

「母音の重出を嫌ふ結果とも見られる。語構成の関係上新に母音が重出すると、前の母音

を落してしまふか、又はワタリの音 (*glide-sound*) に明確な存在を与へて重出母音の成立を裂けようとする。それが外見上子音挿入の現象となつて現はれるのである」(p.13)

と説明している¹⁴⁾。

さらに白石(1998)では、このわたり音の発音について、アイヌ語では「一般に高母音の出わたり音はかなりはっきりと発音される」(p.1)と説明している。そのためもあってか鍋沢の表記においても実際の発音が反映されて、わたり音が表記されることは少なくない。

これは1～5のいずれのノートにおいてもしばしば見られる傾向である。たとえばイゴカルカラ (i=ekarkar → iyekarkar 「私に～をする」)、ウヲクカネクチ (uokkanekut → uwotkanekut 「金鎖のベルト」)(いずれも Nabesawa-3) などがある。

ただし、わたり音についても音韻交替と同様に、必ずしも挿入された表記で書かれるとは限らない。イエカルカル (i=ekarkar 「私に～をする」)(Nabesawa-3) のようにわたり音がない表記も少なからずみられる。

6.4 母音を重ねた表記

田村(1996)では、アクセントのある母音を重ねることによって、意味合いを強める語形を「強調形」として掲載している。たとえば apunno 「静かに」の強調形として apuunno 「静かあーに、そうっと」(p.20)、canan 「平凡である」の強調形として caanan 「全く平凡である、粗末である」(p.41)、pon 「小さい」の強調形として poon 「ちっちゃい、とても小さい、とても少ない」(p.542) などがある。

このような強調形と見られる語形が、民博所蔵ノートにおいては、ソヤンノヘタブ (soonno hetap 「本当に」)(Nabesawa-3) という表記で確認できる。このソヤンノ soonno は sonno 「本当に」のアクセントのある母音を重ねた強調形である¹⁵⁾。同様の例として、ソオネウサ (soone usa 「もしや」)(Nabesawa-3) があり、このソオネ soone も sone の母音を重ねた語形である。

このような母音を重ねた表記としては、民博所蔵ノートと同じく鍋沢による筆録の『アイヌ祈道全集』『沙流川筋の祈祷集』ならびに『アイヌ・モシリ』において、バアセカムイ (paase kamuy / pase kamuy 「重い神」) という表記で多くみられる。このバアセは pase 「重い」のアクセントのある pa の母音を重ねた語形である¹⁶⁾。特に『アイヌ祈道全集』はバアセカムイという用例が多く、バセカムイという表記は見られない¹⁷⁾。

一方、民博所蔵ノートにも祈詞のテキストはあるものの、バアセカムイという表記は見られず、バセカムイと表記されている。

同様に『アイヌ祈道全集』では ne hi tapan na 「～ですよ」をネヒタパンナア、na sama ta 「さらに、そして」をナアサマダといったように、終助詞「～よ」であれ副詞「もっと、まだ」であれ、na という語形の語をナアあるいはナアーのように母音を重ねた表

記や長音記号を用いて表記することが多い。しかし民博所蔵ノートでは、ネヒタバナンやナサマタという表記のみが見られ、ナアあるいはナアーという表記は皆無である。

したがって、民博所蔵ノートにおいては、ソランノ soonno のような強調形も確認できるものの、同じ筆録者による別のテキストと比べると、全体的に母音を重ねた表記については種類や頻度が少ないと言える。

さらに、民博所蔵ノートにおいては長音記号がまったく使われていないが、上記の『アイヌ祈道全集』の例から、鍋沢が長音記号を知っており、さらに実際にアイヌ語の表記に使っていることがわかる。そのため、民博所蔵ノートにおいては、長音記号はあえて使わないという書き方の選択の仕方をしていることがわかる。

6.5 -i 音の挿入

前述の表記体系一覧とは別に、音節末子音の直後に -i 音が挿入されて書かれていることがしばしばある。特に、Soyanmat 「ソヤの女」をソヤウンマチ, huttat sekora 「筐と(いう)」をフッタチセコルと表記する (Nabesawa-1) など、-t 音を「チ」で表している例は多い。さらに、カネアムセッチ (kane amset 「金の寝台」) (Nabesawa-5) という、ッチを用いた表記も 1 例のみある。

-t のほか、シキヌレワ (siknure wa 「生き返らせて」) (Nabesawa-1)、ポロンノエキワ (poronno ek wa 「たくさん来て」) (Nabesawa-2) など -k の直後に -i 音が挿入された「キ」という表記や、アカリワ・アンペ (a=kar wa an pe 「私が作っていたもの」)、アキルズ (arki ruwe 「来ること」) (いずれも Nabesawa-1) など -r 音の直後に -i 音が挿入されてりと表記された例も少なからず見られる。

このように音節末子音に -i 音の響きが聞こえる傾向は、たとえばアイヌ語鶴川方言話者である新井田セイノや吉村冬子などのように、ほかのアイヌ語話者の発音においても確認できる¹⁸⁾ことから、実際の発音がそのまま反映された表記だと考えられる。

6.6 同じ音素の連続における表記の脱落

民博所蔵ノートにおいては、同じ音素が連続する際に、その 1 つが脱落して表記されないことがしばしばある。

たとえば、チュボクワ (cuppok wa 「西から」) (Nabesawa-2) は前述の表記体系を踏まえると、チュッボクワあるいはチュブボクワなどの表記が予想されるところだが、これらのッ、ブは書かれずに、-pp- のひとつが省略されている。同様に、フレウシネ (hure ussi ne 「赤い漆として」) (Nabesawa-5) でも、ウッシが予想されるところだが、-ss- のひとつが省略されている。子音だけではなく母音・半母音についても同様で、カムイノド (kamuy inotu 「神の魂」) (Nabesawa-3) はカムイイノドが予想される表記だが、-ii- のひとつが省略されている。

当然のことながら、単なる脱字の可能性も高い。だが、いずれの場合も cúppok, ússi, kamúy というアクセントのある閉音節の音節末子音が脱落しているという共通点もあることから、傾向のひとつとして挙げておく。

6.7 ッの挿入

全体として稀な例だが、アネコッテカル (an=ekotekar 「思っ^ッて」) (Nabesawa-1) のように、表記体系の原則からすると、コテが予想される場所に、破裂音 t の前にッが挿入されたコッテという表記が確認できる。

同様の例として、カムイシッキウトル (kamuy siki utur 「神の目の間」) (Nabesawa-4) があり、こちらもシキが予想される場所であるにも関わらず、シッキと表記されている。

6.8 祈詞末尾の棒線

Nabesawa-4 所収の祈詞のみ、各テキスト末尾に、「バセカムイ——」「キナンコンナ——」のように、「——」のような線が引いてある。いずれも 1 文字分の長さではなく、2～3 字分程度ある。

祈詞のテキストの末尾のみという位置に見られ、ほかのテキストや場所ではまったく確認できないこと、また単なる長音記号にしては長く見えることから、祈詞の最後に発せられる「エエエエ」のような儀式的なかけ声（咳払い）を表現しているものと推測される。

このかけ声は、声門閉鎖音を入れながら母音を延ばすというような発声である。たとえば静内の葛野辰次郎による祈詞の記録では、アイヌ語でシムシシカ simusiska と言うこの部分を、「ハ エエエエン (ha eeen)」のように表記している（財団法人アイヌ民族博物館 2002: 149）。

7 まとめ

1928（昭和3）年から1959（昭和34）年にかけて筆録された5冊の民博所蔵ノートを見ると、鍋沢が非常に正確にアイヌ語を音転写していることがわかる。

さらに、母音やナ行 (nV)、マ行 (mV)、ハ行 (hV)、ラ行 (rV) などの表記は、年月を経てもほぼ一定の表記が用いられている一方で、音節末子音や, tu, we, ye などの表記には少なからぬ変容が見られる。変容の大きい表記は日本語のカナ表記体系に該当する文字がない音素・音節が多い。このようなアイヌ語のカナ表記において特に問題となる音についての、表記の工夫・改定をしてみた試行錯誤の様子を、民博所蔵ノートからはうかがうことができる。

全体的な傾向としては、cV に対して Nabesawa-1・2 ではチャ行が使われていたにもかかわらず、Nabesawa-3以降はチを除いてザ行やツに移行していったことや、we に対しては基本的にヱあるいはヱが用いられており、ウヱやウエのように2文字を充てる例は少ないこと、sV をシャ行では表していないことなどから、1開音節に対して1字を充てることを基本的に志向していた様子がうかがえる。

また、音韻交替や-i音の挿入などが表記に反映されていることから、鍋沢の表記においては、もともとの単語の意味を反映した形態素分析を重視した表記よりも、実際の発音の仕方・聞こえ方をできるだけそのまま表記に落とすことが優先されていると言える。

表記の変遷に目を向けると、p, t, k に対して清音・濁音の両方が使われるのようになりはじめたのが1954(昭和29)年(Nabesawa-3・4)からであるほかは、1959(昭和34)年(Nabesawa-5)になってから見られる変容が大きい。たとえば、ヱやブといった半濁点を用いた表記が登場することや、-kk- に対してそれまで使われていたクがほとんど用いられなくなってクヤツに移行することなどは、Nabesawa-5のみに見られる特徴である。『アイヌ・モシリ』が1957(昭和32)年から刊行が始まったことを踏まえると、この同人誌への関わりも含め、この時期以降に交流のあった人物とのやりとりを参考にしたという可能性も、Nabesawa-4からNabesawa-5への間に起こった変容の理由のひとつとして考えられる。さらには、鍋沢と交流のあった金田一京助らの影響も考えられることもあり、鍋沢の表記の変容ならびに周囲の人物の表記との影響関係については今後の課題としたい。

さらに、民博所蔵ノート後にあたる、『アイヌ・モシリ』への投稿テキスト(1960~1965(昭和35~40)年頃)との違いとしては、『アイヌ・モシリ』では「-p, -t, -k, -s, -m に対しては小文字による表記を行っている」(p.26)が、民博所蔵ノートにおいて、小文字が用いられているのは「-p, -t, -k」に限られ、-s, -m については小文字での表記は見られない点がある。

このほかにも、『アイヌ・モシリ』においては「-pp-, -kk- などはチカッポ(cikappo「小鳥」)、ワッカ(「水」)のように書き、チカッポ、ワッカのような促音表記をしていないことなどが挙げられる」(中川 2006: 26)とのことだが、民博所蔵ノートにおいてはク、ク、ブ、フもそれぞれ見られるものの、ツをもちいた促音表記もまた多く見られる。さらに、we, ye について『アイヌ・モシリ』ではヱあるいはウヱやイヱが主要な表記となっているが、民博所蔵ノートではヱが主要な表記で、半濁点を用いた表記も Nabesawa-5の後半には見られるものの、まだ主要な表記とはなっていないことも、違いのひとつである¹⁹⁾。

以上のように、民博所蔵ノートからは、鍋沢元蔵の表記が必ずしも筆録初期から一定だったわけではなく、試行錯誤しつつ表記体系を確立していった様子がうかがえる。

清音・濁音をはじめとして、同一音素に対して複数の表記が使われている場合、その

使い分けについては、同じ語に対して両方の表記が使われていることから、本稿においては使い分けはないものと解釈した。だが、当該音素の前後の環境が有声音／無声音であるか、母音／子音であるか、語頭／語中か、あるいはアクセントの有無といった違いによって、いずれの表記が使われることが多いかという傾向が出てくることは大いに考えられる。本稿では、このような表記の使い分けのシステムといった一貫性の有無についての分析には至らなかったが、それについては今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿の内容は2015年2月18日に行われた第14回北フォーラム（於・北海道大学アイヌ・先住民研究センター）において、同題にて発表を行い、多くの御指導・御指摘をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 2) 片山採録テープについての詳細は、中川（2014）参照。
- 3) ただし、和訳については『アイヌの叙事詩』では共著者である扇谷昌康の手が入っている影響もあってか、『アイヌ・モシリ』と大きく異なっている。たとえば『アイヌ・モシリ』では「戦争の濃霧が 遠国方面へ／雨雲に 雲の足が／立って見える」（釧路アイヌ文化懇話会 1998: 484）となっている個所が、『アイヌの叙事詩』では「戦さのもやが／四方の雲裾に／雨雲になって／雲足高く／立っていて」（p.205）となっており、同一の内容ではあるものの、表現の言い換えは顕著である。
- 4) 鍋沢が同じストーリーを時期をおいて筆録したバージョン（ヴァリエント）が複数あるテキストとしては、「ニタイバカイエ」という物語がある。その比較は、遠藤（2013）にて行ったが、表現のみならずストーリー展開などにも違いが見られた。
- 5) 本稿における民博所蔵ノートからの引用にあたっては、中黒（・）などの区切り記号はすべて省略した。また、下線はすべて引用者による。
- 6) 本稿において、「わたり」あるいは「わたり音」とは金田一（1960（1993）: 156）にある「音韻添加」のように母音連続においてwもしくはyが挿入される現象を指す。6.3に後述。
- 7) インクのにじみなどのために濁点・半濁点の区別・判読が難しい場合も少なからずあるが、おおよその傾向としては本文にあるように、バ行が優勢である。
- 8) ただし、tuについては次節で述べる。
- 9) ここでは正確にはcaに対してではなく-tcaに対してチヤが充てられているが、後述（6.6）のように同一の音素が連続する際に、一方の表記がなされないことがある。ここでも-tc-（=-cc-）のうち、tが表記から落ちてしまったものと解釈し、チヤはcaにあたる用字とした。
- 10) このように同一音素が連続した場合に片方が書き落とされる表記については後述（6.6）。
- 11) その使い分けについては未詳だが、あるいはメロディに乗せて語られる際の音の長さなどが関係している可能性も考えられる。
- 12) ただし1か所のみ、ツチウバレ（ciwciwpare「動き回っている」）（Nabesawa-3）という、ciwをツで表記している例が見られる。
- 13) r + c- の例はこの1例のみだが、ここではチが脱落してしまっている。
- 14) なお、同書ではw、yの挿入のほかにh、n、mの挿入が例としてあげられているが、本稿ではwならびにyの挿入のみをとりあげた。
- 15) ただし、アイヌ語には長母音・短母音の区別はないものの、強調時あるいは韻文のメロディに

- 乗せる際には、母音が長く発音されることもあるため、そのような母音が伸びた形（すなわちここでは〔so^oonno〕ではなく〔so^onno〕）を意識した表記という解釈もできる。しかし、このような表記の用例が全体を通じて非常にまれであることから、メロディに乗せた場合を意図した長母音化ではなく田村（1996）に見られるような、母音を重ねた「強調形」と解釈した。
- 16) バアセヤナア（一）についても、注15)のように、強調形である可能性と長母音化である可能性とがある。
- 17) ただし、カムイバセクル（kamuy pase kur「尊い神」）など、pase kamuyという語句以外のpase「重い」においてはバセも使われている。
- 18) 新井田・吉村の音声を聞ける「アイヌ語音声資料アーカイヴズ」は千葉大学人文社会科学研究所地域研究センターHP (<http://cas-chiba.net/Ainu-archives/>)にて公開中（2015年10月現在）。
- 19) 北海道立図書館北方資料室所蔵のマイクロフィルム・金田一京助ノート（請求番号HM421）に所収の「鍋沢モトアレク筆録ノート」を見ると、1963（昭和38）年筆録のノートにおいてもヱの使用、pV に対してパ行・バ行がともに使われているなど、『アイヌ・モシリ』と同じ特徴が確認できる。

参考文献

遠藤志保

- 2013 「アイヌ英雄叙事詩『ニタイパカイェ』の2種類のテキストに関する考察」千葉大学人文社会科学研究所編『千葉大学人文社会科学研究所』27, pp.19-34, 千葉：千葉大学人文社会科学研究所。

萱野茂

- 2002（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』東京：三省堂。

切替英雄

- 1997 「アイヌによるアイヌ語表記」『国文学 解釈と鑑賞』1997年1月号（第62巻1号）, pp.99-107, 東京：至文堂。
- 1998 「アイヌ語十勝方言話者による仮名書きアイヌ語テキストの分析」『学園論集』96・97, pp.149-169, 札幌：北海学園大学学術研究会。

金田一京助

- 1960（1993）「アイヌ語学講義」『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』（『金田一京助全集 5』）pp.133-366, 東京：三省堂 1993）。

釧路アイヌ文化懇話会編

- 1998 『アイヌ・モシリ—幻のアイヌ語誌復刊』釧路：私家版。

財団法人アイヌ民族博物館編

- 2002 『伝承記録7 葛野辰次郎の伝承』白老：財団法人アイヌ民族博物館。

佐藤知己

- 2008 『アイヌ語文法の基礎』東京：大学書林。

白石英才

- 1998 「アイヌ語高母音の半母音化とわたり音挿入」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1, pp.196-221, 千葉：千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座。

田村すず子

1988 「アイヌ語」 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一, 西田龍雄 『言語学大辞典』 pp.6-94, 東京:三省堂。

1996 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京:草風館。

知里真志保

1936 (1974) 「アイヌ語法概説」 (『知里真志保著作集 第4巻』 pp.5-197, 東京:平凡社 1974)。

中川裕

1995 『アイヌ語千歳方言辞典』 東京:草風館。

2006 「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」 塩原朝子・児玉茂昭編 『表記の習慣のない言語の表記』 pp.1-44, 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

2014 「同資料について」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 16, pp.153-161, 千葉:千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座。

鍋沢元蔵

(発行年不明) 『アイヌ祈道全集』 私家版。

(発行年不明) 『沙流川筋の祈祷集』 私家版。

服部四郎編

1964 『アイヌ語方言辞典』 東京:岩波書店。

門別町郷土史研究会編

1969 『アイヌの叙事詩』 鍋沢元蔵筆録, 扇谷昌康訳注, 門別:門別町郷土史研究会。